

126. 近世坊跡の一様相

—山東町清滝所在 宝持坊遺跡の調査—

1

坂田郡山東町清滝に所在する宝持坊遺跡は、弘仁年間にかかれた真言宗豊山派の宝持院に付随すると思われる坊跡である。

古くからこの清滝の狭小な谷部には多くの寺院が知られ、佐々木京極家の菩提所で京極家18代の墓所がある清滝寺もその一つである。かつてはこの寺にも12坊があったと言われるが、今日では6坊しか知られていない。

現在、宝持坊として知られている宝持院の北の谷部に連なる郭状遺構は、宝持坊のみならずさらにいくつ

かの坊として機能したものと思われる。

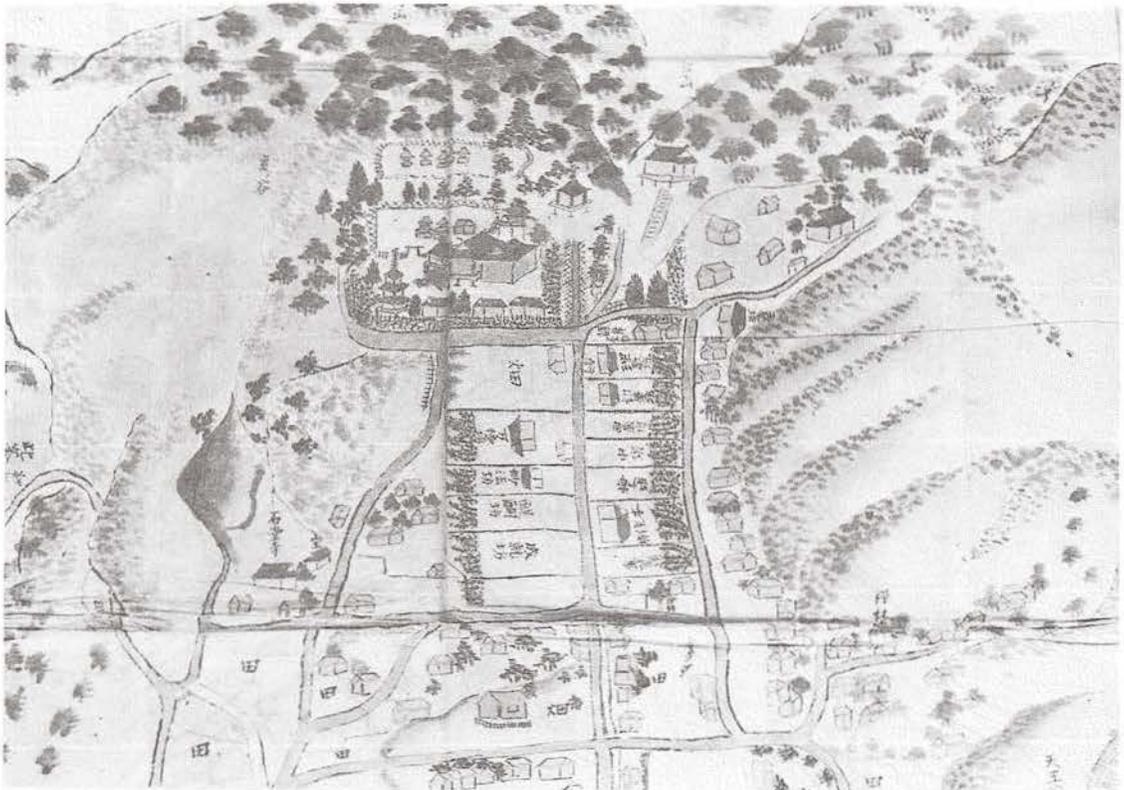
また清滝区の区長宅に保管されている元禄13年の絵図には、寺あるいは坊と思われる建物が鮮明に描かれており、この宝持坊の谷部にも建物が見える。

2

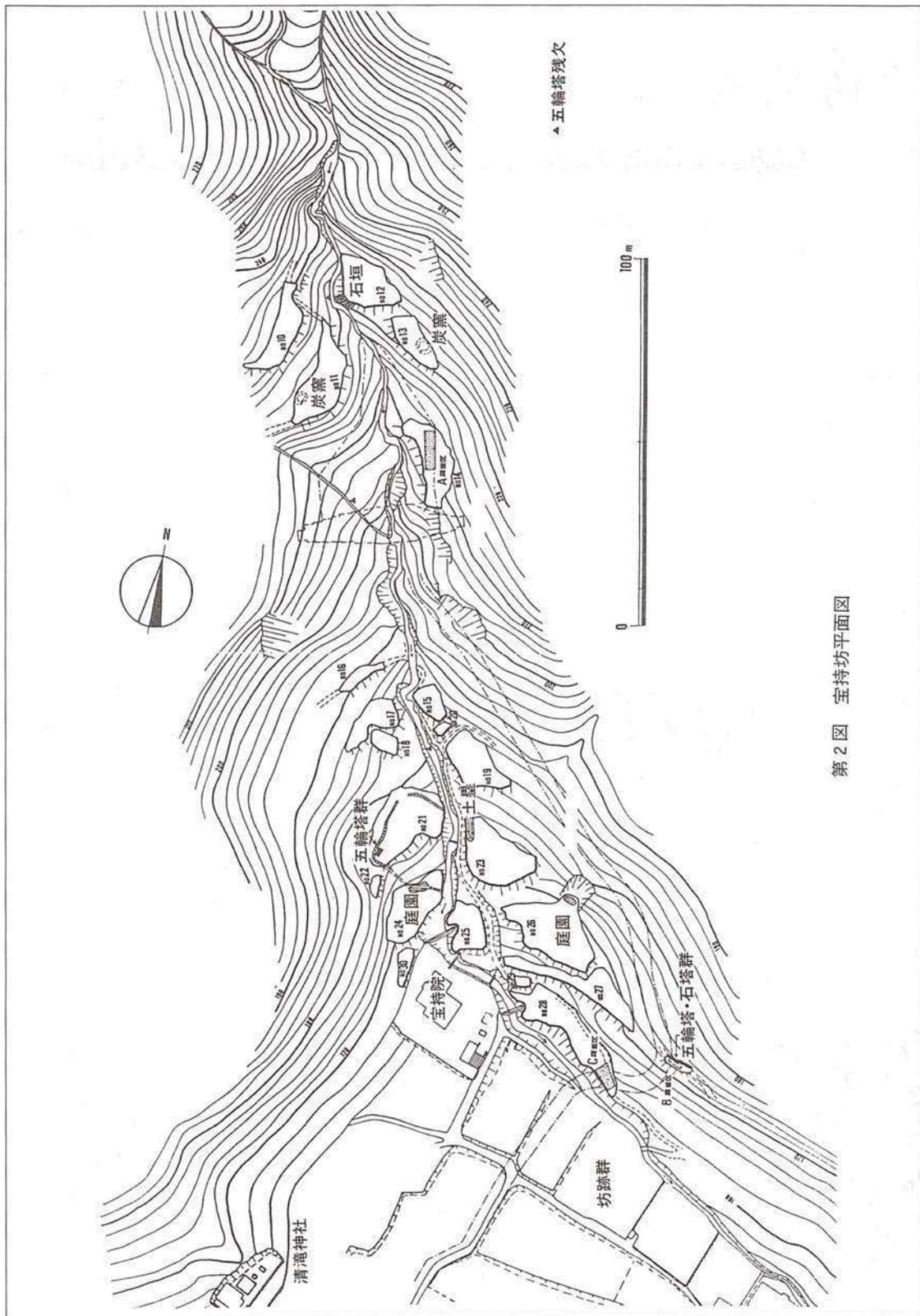
今回の調査は宝持院の北の急峻な谷状部分において、砂防堤予定地とそれに伴う工事用道路予定地を中心に測量調査を実施して、遺跡の基本的な構造をおさえ、遺構への支障が懸念される部分において発掘調査を行い遺跡の保存資料を得ることにした。

平板測量の結果、工事予定地を中心に南北 250m・東西50mほどの範囲でNo10～No30まで21の郭状遺構を確認した。比高差は約70mを計る。

幅1m前後の道で相互に連絡されている郭状遺構は、斜面であったところに平坦面を形成したもので、最大のもは30×15m程度の規模をもつ。石垣(No12)や土



清滝絵図(部分)



第2図 宝持坊平面図



B調査区近景

畚状遺構(No23)、現在も水をたたえる小規模な池や水路並びに流を伴う庭園遺構(No21、No24、No26)などが見られ、また近世の五輪塔・石塔群を伴うもの(No21、B調査区)や時代の下る平面楕円形の炭焼成窯も2基認められた。さらに平地となっている宝持院前に広がる林も絵図やその区画等から谷状に広がる坊跡と同様のものとして理解できる。

測量後工事用図面と照らし合わせると、No14が堆砂部分にあたり、No28郭状遺構とその東にある五輪塔・石塔群の一部が工事用道路にかかることが判明した。従って北からA・B・C調査区とし、試掘トレンチを設定し精査した。

3

A調査区では12×2.5mのトレンチにおいて表土除去を行った結果、表土の腐蝕土下に5~40cmの流土が堆積しており、その下には地山からなる整地面となる。地山整地面上には約20×25cm大の平坦面をもつ石が見え、これを建物礎石と判断した。

B調査区では寛政・宝永・元禄等の年号をもつ一石五輪塔を含む石塔・石仏群の前に4×1.2mのトレンチを設けたが、5~10cmの表土下はすぐ地山となり、墓壇等の下部施設は認められなかった。

C調査区では約3×7mのトレンチを設定した。ここでは北の山側に道状遺構が残っており、そこへの立ち上りが地山整地面において確認でき、近世以降の陶器片が出土した。



位置図(2万分の1、明治26年)

このように宝持坊遺跡として知られる郭状遺構は、中世山城の小規模な郭に酷似したものであり、ここでは少なくとも近世にまではさかのぼる坊跡で、そのいくつかには礎石建物があったことがうかがわれる。それは小規模な池や流をもつ庭園と呼ぶべきものを備えたもので、さらにその周囲には何ヶ所かに分けて墓地あるいは墓標を配置していたことが判明した。このことは谷川に沿ってその周囲に散乱していた五輪塔片からもうかがわれ、谷部分のみならずその下方の平地部にも坊跡は広がるようで、現在の清滝区のいたるところで五輪塔などの石塔群が見受けられるのである。

今回の調査は、中世山城の存在が知られる山の裾部を中心に広がる郭状遺構を全て城関係遺構と判断してしまうことへの反省を促される契機となる調査であったため、自戒をこめてここにその遺構図を紹介した。

(用田政晴)

127. 滋賀県に所在する 和鏡の一例

はじめに

和鏡とは、平安時代以降にわが国で铸造されたいわゆる日本の図案を鏡背面に鑄出した鏡で、長年にわたり数多くの優品、逸品が鑄造された。しかし、その

多くは個人所蔵や、宗教法人などの所蔵であるため、研究発表や博物館施設での公開はおろか、その存在すらも世に知られていないものが多い。今回紹介する和鏡は、現在、大津保健所に勤務されている林田又信氏が所蔵しておられるもので、戦前、滋賀県出身の衆議院議員であった田中養達氏の手にあったものを昭和30年に、譲渡されたものである。鏡は次に述べるように蓬萊鏡(直径11.5cm、高さ1.3cm)で、非常に保存状態がよく、鏡背図様の鑄上りも精緻を極めたものであ

った。

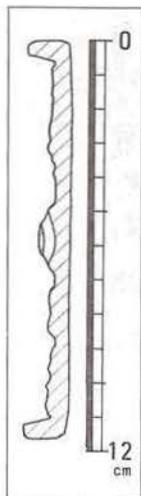
和鏡は発掘調査によっても出土しているが、今回のように個人所蔵のものが公開される機会はきわめて少ない。今後ともそのような埋もれた資料をも発掘してゆく必要性を痛感する。この貴重な資料の公開を快諾して下さった林田氏に感謝します。

蓬莱鏡

今回紹介する和鏡は蓬莱鏡（蓬莱山鏡）と呼ばれているもので、鏡によっては多少の違いはあるものの基本的には蓬莱神仙の図を鏡背面に鋳出したものであり、その図様はいずれも鈕座を中心に岩石山・波濤・松竹を配し、左方に二羽の親子鶴を配する^①のが通例である。特に今回の鏡においては、高橋健自氏がその著書『鏡と劔と玉』の中で徳川期の実例として報告されている和田千吉氏蔵のものと酷似しており、その詳細な図様と特徴はそのまま徳川期の特徴として高橋健自氏の述べられる通りであり、その特徴を連記してみると以下のようになる。^②

1. 円鏡に内外区を別ける場合にはその界線二重圏を成す。
2. 円鏡の鈕は大概亀鈕にして然らずば極めて小なる素鈕なり。亀鈕は首を上方に向くるあらずば、必向って左方に向えり。（略）左方向に向ける時は必蓬莱の図様を表し親鶴は喙を下にし、子鶴は之を上にし是も亀と共に三者接吻の如く見ゆ。（以下略）
3. 紋所を付くこと行はれたり。神社寄進等の用に供したりけむ。（略）自家の紋所を鋳させたるものまた少からず。
4. 作者銘あるもの多く『高砂』『壽』等の吉祥題字を鋳出したるも見ゆ。作者銘は初期には『天下一』の下に単に名のみを書きたるもの多けれども末期に至るに従い更に何の條下に述べたる如く、一たび信長の禁令に遇ひたれども、幾ばくもなく行はれずなりしたや、徳川期の初には一般に認められたり。

以上が徳川期の特徴である。そして、これらの条件を今回の鏡に照らし合せてみると次のようになる。内外区を別ける二重圏の存在、鈕が左向亀鈕であること、亀の口・親子鶴の喙が互に接すること、向かって右に松と竹、左に竹のみを配し、他に岩・波濤があることにおいてはこれらの条件を全て満たしており、和田千吉氏蔵のものと同様に徳川期の鏡として見る事ができる。しかし、和田千吉氏蔵にみられる3・4の条件である紋所や作者銘、吉祥題字がこの鏡には見られない。これらの吉祥題字、『天下一』の銘は織田信長の禁令以前や以後には見られるものであり、その意味でもこの蓬莱鏡は徳川期初期もしくは安土桃山時代中の



ものであると言うことができるであろう。

蓬莱山信仰

最後にこの鏡の名称となっている「蓬莱山」について若干ふれておきたい。このことについても高橋氏は^③「蓬莱山の思想は古く支那に起因すれども我が文学上に現るに至りしは平安朝以後に属し、芸術上に現はれたるもまた藤原期以後にあり。而して之を鏡背に表すに至りしは足利期に始まれり。」^④と言及されているが、そもそもこの蓬莱山は道教^④のいうところの神仙信仰から始まったものであり、渤海中に三つの神山「瀛州・方丈・蓬莱」がありここに多くの仙人がいて不老不死の薬があると記した『史記』の三神山説が有名である。日本でも早く、日本書紀に始まり『懐風藻』にいたり、平安時代初期には、亀にひかれ仙女のいる蓬莱宮に行き長生するという浦島子説話の神仙譚に発展したかたちでみられる。さらに平安末期には『梁塵秘抄』に万却亀の背中をば沖の波こそ洗うらめ、如何なる塵の積りいて蓬莱山と高からん。海には万却亀遊ぶ蓬莱・方丈・瀛州、この三つの山をぞ載ける、巖に恋する亀の齢はば譲る君をばみな譲る、海には万却亀遊ぶ。蓬莱山をや載ける。仙人童を鶴に乗せて太子を迎へて遊ばばや」と謡にも見られ、その庶民への浸透がうかがえる。実際に鏡の鏡背にこの図様がみられるのはこの時期頃からであり、その後徳川時代にまで受け継がれていく。おそらく、魂をうつす鏡に長寿を願う気持が流行を生んだものと思われる。現代でもこの蓬莱山信仰は、亀は万年・鶴は千年として長寿や吉祥を願うお目出たい言葉として生きついていることは興味をひくところである。（木戸雅寿・岡本武憲）

註

①・②・③：高橋健自 『鏡と劔と玉』 富山房

明治44年

④：『道教』 1、2、3 平河出版社 昭和58年